

三、本町並びに付近を通過した台風

1、台風年次別調

年来 月日	最低気圧 mm	風向	風速 (秒米)	雨量 (耗)	記 名 称	事 進行方向	備 考
明治四、八、一六	七三、六	東南東	一五、七	二四、一	土佐湾	北上	日本では台風 に名をつけ
二、七、三	七三、八	南東	三、三	二六、八	室戸岬	北北西	に名をつけ
二、九、三	七三、三	北	七、一	三三、四	県南岸	東	ず、何月何日
元、九、二	七三、七	〃	一七、七	三〇、三	〃	〃	の台風、また

元、九、 二六三	元、九、 八七	元、九、 四三	元、九、 九六	元、八、 九八	元、九、 二五	元、六、 三三	元、一、 五四	元、九、 四	元、八、 八	元、六、 三	元、二、 九	元、七、 〇	元、一〇、 一〇	
九六、〇	九九、三	九五、四	一〇五、三	九七、三	九三、四	七四、五	七三、六	七五、二	七四、三	七四、九	七四、一	七四、二	七四、二	
南東	北西	〃	〃	南東	北西	北	〃	南東	北北西	南東	南	西	南南東	
三〇、二	一六、五	三、二	一六、五	二〇、二	三、五	一八、四	二七、九	二四、七	元、三	一四、〇	三、六	一六、二	一六、七	
一五、九	九〇、五	八三、六	八四、八	七六、七	三〇、五	二四、一	二六、九	九六、九	二四、五	二九、二	二五、七	一〇四、九	四六、六	
一五号	一四号	一二号	一三号	五号	一三号	ダイナ	ルース	キシア	ジェーン	デュデイス	デラ	アグネス		
鹿児島		〃	〃	九州			九州	九州縦断	県東部	九州西海岸	九州		九州	
日本海	九州中間	室戸沖	九州縦断	四国中部 播磨灘	〃	土佐沖	日本海	広島		対島海峡	瀬戸内海 西部	土佐沖	瀬戸内海	
北北東	北東	〃	〃	北北東	〃	北北東	北北西	〃	北東	北北東	北東	東	北	北東

以上の如く、明治二十四年から、昭和二十九年まで、六十四年間に本町及び付近を通過した台風の回数は五十七回で、約一年一カ月余に一回の割合となっている。

風速の最大は昭和十六年八月十五日の三七・八米で、五十七回の平均風速は一六・九米である。また最大雨量は昭和二十年十月十日の四七八・六耗、五十七回のもたらした全雨量は、七一六五・四耗で、一回の台風は平均一三二・七耗の雨を降らしている。(雨量一耗は、一平方米に一リットル、(五合五勺)一坪に約一升八合二勺の量)であるから、百耗(一坪に一石八斗二升)降ると、洪水が出ることになる。

第九章 災 害

昭和初年以後に於ける災害の内、風水害と火災については、前に記述してあるので、ここでは震災と雹・雷害について記する。

第一節 震 災

一、南海大地震

昭和二十一年十二月二十一日、午前四時十九分から三十五分六秒間、四国・近畿地方の一帯に、大地震（震幅東西三、六cm、南北二、七cm、上下動相当大きかったが震幅不明、徳島測候所観測）があり。震源地は、紀伊水道の南部にあつたため、県南の沿岸地方には、津浪におそわれたり、地盤が約三十cmも沈下して、田畑や塩田が海と変つた所もあつて、相当の罹災者ができたので、町民の内には救援物資を送つた者もあつた。

本町に於ても、多くの人家その他の建物に相当の被害（庇の落下・家屋の傾斜・壁の裂傷等）があつた。

二、昭和二十二年以後の地震

昭和二十二年一月から、三十年五月まで、本町及び県下に起つた有感地震の回数は、一三九回（年平均二八回余）の多きに及び、その内二十三年と二十七年には、各一回の中震があつたが、被害を生ずる程度のものでなかつた。次にその年次別調をかかげる。

(自昭和22.1
至〃 30.5) 本町及び県下の有感地震調
(徳島測候所観測)

調査 年次	回数	最 大 地 震			
		月日	程度	最大振幅単 位ミクロン	震源地
昭和22	90	1.16	弱震	4,500	本 県 和食付近
23	44	4.18	中震	19,000	潮岬沖
24	27	1.20	軽震	3,000	
25	18	11.6	弱震	17,500	田辺湾
26	18	3.11	軽震	480	
27	10	7.18	中震	22,800	吉野地震
28	19	5.30	軽震	450	
29	6	3.22	軽震	100	
30	7	5.18	軽震	540	本県南部
計	239				

第 二 節 電 害

昭和八年六月十四日午後八時四十五分から十五分間、阿波郡を中心として、麻植・板野両郡の一部に北西の突

風と雷雨を伴った大降雹(大なるものは鶏卵大の扁平形)があった。

この時町小学校舎その他家屋の風に面した窓硝子の下部は、殆ど破壊せられ農作物も甚大な損害を被った。

第 三 節 雷 害

本町では数年間に一・二回の雷害を受けている。即ち昭和以前にも落雷のために、人家が焼失したり、大木が損傷したことがあったが、その後にも昭和八年頃、鴻の巣の大松が、落雷のために大裂傷を生じ、同十四年頃香美の或農家が雷火のためまさに大事に至らんとしたこと等があった。